

## イエスの再臨

アミール・ツアルファティ

- イエスの再臨はいつなのか? -

<https://youtu.be/tZLHfuSUp0o>

今朝の最初のメッセージのタイトルは、『イエスの再臨』。もちろん疑問は、私たちのために？それとも、私たちと一緒に？これは微妙な質問です。大部分において、地球上のほとんどのキリスト教徒は、文字通りイエスが戻って来ることを教えていないか、あるいは、教会はここでイエスが戻って来るのを待っている、と教えているのです。わかりますか？それが主な教えです。実際、私がこのメッセージを教えるきっかけになったのは、フィリピンにある巨大教会のフィリピン人牧師が、民衆に向かって言った説教や発言です。

「私たちは、イエスの再臨に備えなければならない」

ところで、それ自体は悪いことではありません。しかし問題は、私は考えていたのですが、私たちは、イエスの再臨に備えなければならないのか？それとも、私たちは彼と一緒に集まる準備をしなければならないのか？それが問題です。私たちのためか？それとも私たちと一緒にか？そして再臨の定義は、基本的には何なのか？さて、まず第一に、私が言ったように、大きな、大きな混乱があります。第1コリント14章33節には、こう書かれています。

**それは、神が混乱の神ではなく、平和の神だからです。聖徒たちの全ての教会で行われているように…**

**(第1コリント14章33節)**

今朝の、この説教壇では明確にされるべきです。神の御言葉には混乱はありません。イエスの来臨に関しては絶対です。混乱は、実際には教会の説教壇と、それからシナゴグもつけ加えておきましょう。おそらく、皆さんは思っているでしょう。「シナゴグって、どういう意味だ？」言っておきますが、ユダヤ人も…キリスト教徒だけでなく、ユダヤ人も同様に、メシアを待ち望んでいるのです。そして彼らは、主の来臨を待っていて、彼らには、それがいつになるか分からない。しかし彼らは言います。「彼が来られるまで待つ」ユダヤ教の神学の問題点は、旧約聖書の中にあるイエスの初臨に関する数十の預言を、完全に無視していることです。そして彼らは、ただ、この再臨の時に彼が来ることを考え、祈り、期待しているのです。彼らは、それを「初臨」と呼び、「唯一の来臨」だと。ユダヤ人はメシアの再臨を祈ったり、願ったりしていません。しかし、現実には聖書のメシアの地上再臨は、ユダヤ人が待っているものです。この地上に来て、君臨するために。ですから、彼らは初臨を飛ばして、再臨に直行します。そのため、マタイの福音書23章37節には、このように書かれています。イエスが、ロバに乗ってエルサレムに入るとき、覚えていますか？彼は都を見て泣かれました。そして言いました。

**ああ、エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者。わたしは、めんどりがひなを翼の下に集めるように、あなたの子らを幾たび集めようとしたことか。それなのに、あなたがたはそれを好まなかった。(マタイ23章37節)**

“あなたは、1つのことに心を奪われていた。それは、わたしが白馬に乗って来て、わたしが王としてやって来て、そのすべてを滅ぼし、あなたの敵の全てを滅ぼす。そして、わたしがエルサレムに来て王座に着き、全世界を治めるはずだ。そして、世界の平和と繁栄がある、と。あなたは、ただ預言者の言葉をすべて受け入れなかった。それは、あなたがたを、あなた自身から救うために、わたしが来ることを語ったものである。” そのために、イエスはあの都のことで、あのようには嘆かれたのです。

しかし私が言ったように、ユダヤ人の混乱だけではありません。キリスト教徒の混乱もあります。混乱は、ただひとつの理由に関連しています。それは何ですか？彼らは携拳を飛ばすか、もしくはそのようなものがあると信じていないかのどちらかです。彼らは、それを教えません。彼らは、それを信じていません。あるいは、幻想的すぎると思っているか。彼らは、彼らが他のものを信じるようには、これを文字通りに受けと

めません。私が世界中の牧師からずっと聞いていることのひとつ。また、彼らは他の牧師や他の神学者の言葉を引用までして言います。

「パウロは携挙を信じていなかったし、イエスも信じていなかったのだから、あなたも信じてはいけない」たとえば、クルト・ウィレムスは2017年5月9日、“In Theology (神学の中)”で、このように言いました。私が、このメッセージをまとめるきっかけになったのは、これです。なぜなら、聖書を学ぶ者として、携挙と再臨の間には大きな違いがあることを理解しなければなりませんから。これらの出来事は、聖書の中で同じものではありません。最初の区別、最初に違いがハッキリと分かるのは、携挙とは、私たちが空中で主に会う時のことであり、それに対して再臨は、私たちが主とともに地上に戻ってくる時です。この2つは、別物です。もちろん、皆さん全員が知っているとおりに、携挙では信者が取り上げられます。引き上げられ、空中で主に会う。第1テサロニケ4章16節から17節。

**主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に…**

ここで、ギリシャ語の「ハルパゾ」という言葉が出て来ます。

**一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。**

どこで？ ”空中で”。今日、ここにいる私たち信者とイエスとの集合場所は、イエスが地上に戻ってくる時ではありません。そうではなく、私たちが彼と会うのは、どこですか？ 空中です。そして、こうあります。

**このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。(第1テサロニケ4：16～17)**

つまり、私たちが空中でイエスに会った瞬間、イエスが行かれる所はどこでも、私たちも彼と一緒にです。分かりますか？ もし彼が、天国で私たちと一緒にいるなら？ 私たちは彼と一緒にいます。彼が地上に戻ってきたら？ 私たちは彼と一緒にいます。分かりますか？ 彼のおられる所は、どこでもです。なぜなら、その瞬間から、私たちはいつも主と一緒にですから。再臨では、信者は主と共に帰って来ます。ゼカリヤ書14章5節の後半は告げています。

**私の神、主が来られる。すべての聖徒たちも主とともに来る。(ゼカリヤ14章5節)**

イエスが地上に戻ってくる時、そして、ゼカリヤ14章には、その足がオリブ山に立つと記されています。また聖書は告げています。彼はひとりでは来ません。彼は、全ての聖徒たちと一緒に来ます。ヨハネの黙示録1章7節には、こう書かれています。

**見よ、彼が、雲に乗って来られる。すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。**

ほら、彼が言ったことを見てください。

**地上の諸族はみな、彼のゆえに嘆く。しかり。アーメン。(黙示録1章7節)**

黙示録19章14節。

**そして天の軍勢がまっ白な、きよい麻布を着て、白い馬に乗って彼につき従った。(黙示録19章14節)**

イエスが地上に戻られる時、私たちは白い馬に乗って、彼の後に従います。私たちは、彼の顔ではなく、彼の背中を見ることとなります。もし、あなたが信者で、今ここに座っていて、そして、イエスが地上に戻っ

て来た時、彼の顔を見たいと私に言うなら、あなたに残された選択肢は1つだけで、それは、あなたが携挙されないことです。信者はイエスの再臨の時、イエスの顔を見てはならない。彼らが見るべきなのは、イエスの、何ですか？ 背中！なぜなら彼らは、何？

**白い馬に乗って彼に従っていた。（黙示録19章14節）**

「わたしについて来なさい」彼について行く。そういう事です。イエスに従うと、イエスは、あなたのリーダーになります。この地上で、彼は弟子たちに言われました。「わたしについて来なさい」そして天国でも、また、彼の再臨においても。私たちは、常に彼に従うのです。それを理解していますか？

2つめに理解しておかなければならないことは、教会の携挙は、大患難の前に起こらなければなりません。そして、イエスの再臨は、大患難の後に起こらなければなりません。聖書は、それらのことについて非常に明確に述べています。大患難は、将来的に起こる7年間の、神がイスラエルの懲らしめを完了され、世界の不信者に、最終的な裁きを下される時です。これはまた、地球上に生きた全ての人間を対象にした、個人の裁きではありません。いま話しているのは、その時のままの世界のことで、携挙は、大患難の前に起こりません。どうして分かるのか？それは、第1テサロニケ5章9節から10節で、彼が言っているからです。

**神は、私たちが御怒りに会うようにお定めになったのではなく、主イエス・キリストにあって救いを得るようにお定めになったからです。主が私たちのために死んでくださったのは、私たちが、目ざめていても、眠っていても、主とともに生きるためです。（第1テサロニケ5章9節から10節）**

ちょうど、第1テサロニケ4章が言っているように、あなたがキリストにあって眠っていても、まだ生きていても、あなたがたは皆、彼が私たちを彼のもとに連れて行ってくださる時には、彼と一緒にいることになるのです。そして、私たちが御怒りに会うようには定められていません。預言者ダニエルが、70週の最後の週について記述したとき、その週、その恐ろしい大患難の週は、週全体を、ヘブライ語で「ザーム」と呼び、英語では「怒り」を意味します。そして私たちが、その御怒りには定められていません。ヨハネの黙示録3章10節で、イエスは教会の1つに言われます。

**あなたが、わたしの忍耐について言ったことばを守ったから、わたしも…**

さて、「From（※日本語は“時には”）」に注目してください。ギリシャ語で「ek」。

**地上に住む者たちを試みるために、全世界に来ようとしている試練の時には、あなたを守ろう。**

**（黙示録3章10節）**

7年間の大患難は、試練の時から始まります。あなたは、この男を救世主を選ぶのか？そして、ヤコブの苦難と、そのすべてをもって最後の最後に激しい大患難で終わるか？でもこれは、私たちが定められていることではありません。私たちは取り去られ、私たちは、これには参加しません。再臨は、大患難の終わりに起こります。黙示録19章で、彼は言います。

また私は、太陽の中にひとりの御使いが立っているのを見た。彼は大声で叫び、中天を飛ぶすべての鳥に言った。『さあ、神の大宴会に集まり、王の肉、千人隊長の肉、勇者の肉、馬とそれに乗る者の肉、すべての自由人と奴隷、小さい者と大きい者の肉を食べよ。』また私は獣と地の王たちとその軍勢とが、馬に乗り給う者とその軍勢とに対し、戦争をするために集まって来るのを見た。（黙示録19章17節から19節）

もし、私たちが地球上にいるなら？一体全体どうやって、反キリストが、イエスの後ろについてくる軍勢である、私たちと戦うのですか？分かりますか？私たちが戻ってくる時、イエスは彼の白い馬に乗り、我々は、私たちの白い馬に乗って来ます。世の軍隊は実際に…、つまり反キリストは、あきらかに彼に対して戦争を

しかけようとして。それと、その軍勢である私たちに対して。お分かりですか？第1テサロニケ1章9節から10節には、こう書かれています。

**私たちが、どのようにあなたがたに受け入れられたか、また、あなたがたが、どのように偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになり、また、神が死者の中からよみがえらせなされた御子、すなわち、やがて来る“御怒りから”私たちを救い出してくださるイエスが天から来られるのを待ち望むようになったか、それらのことは他の人々が言い広めているのです。（第1テサロニケ1章9節から10節）**

彼は、来るべき御怒りから私たちを救い出してくださる。過去形・現在形・未来形を調べる時は、ギリシャ語とヘブライ語の、正しい文脈を理解することが非常に重要です。だから、私たちは間違いなく、御怒りの前に取り去られ、彼と一緒にになります。そして御怒りの最中、私たちは彼と一緒にいて、そして最後の最後、彼が御国を確立するために戻って来られる時、私たちは彼と一緒に戻ってきます。これは重要です。次に、知っておきたい大切なことの3つ目は、贖いがあり、それは携挙です。そして、再臨の時には裁きが起こります。2つのこと。携挙では、信者は、救いとして神によって地上から連れ去られます。だからこそ、私たちの時代は、聖書の中でノアの時代にたとえられているのです。みんなが好き勝手にやっていて、信者だけが、何が起こるのかを知っています。私たちは、どれだけ準備が必要なのかが分かります。実際、私たちは今、それをしていません。私たちは勉強し、自らを備えています。私たちはある意味で、自分の箱舟を造っているのです。世は、ある意味、私たちのやっている事をバカにしている。しかし、私たちは知っています。その時が来て、携挙が起こると、実際、私たちは「引き上げられる」のです。怒りの洪水が地を覆う時、それが私たちを押し流さないように。ですから、携挙で、救い出すために、信者は神によって地上から連れ去られます。そのことを知っていることは重要です。聖書全体を通して、聖書によると、イエスが私たちのために戻ってくる時、イエスは何のために戻って来るのでしょうか？もう罪の問題ではなく、そうではなく、何のために？体の救いのため、体の贖いのためです。ローマ人への手紙8章に書いてあるとおりです。ヨハネの福音書3章17節に書いてあることを見てください。だれもがヨハネ3章16節を引用するのが好きです。とても良いし、それも分かります。しかしヨハネの福音書3章17節には、こう書かれています。

**神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。**

**（ヨハネ3章17節）**

しかし、その後、ヨハネの福音書14章3節には、こう書かれています。

**わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て… それから？ あなた方をわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。（ヨハネ14章3節）**

イエスは、ヨハネ14・15・16章の最も美しい祈りの中で、こう言われています。「あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます」イエスは、御父のもとへ行くことを知っています。しばらく教会から離れてしまうことを知っています。そして、「あなたがたを孤児にしておかない」と言われます。「わたしは、あなたがたのために場所を用意しないとイケないので、行かなければなりません。でも、わたしが戻ってきたら、わたしは、あなたがたのために用意した場所にあるあなたがたを連れて行きたい」分かりますか？イエスは、決して言われませんでした。「わたしのために場所を用意してほしい。そうすれば、わたしはあなたがたの所に戻ってこよう」彼は言われました。「あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。そして、あなたがたは、わたしと一緒に来るのです」大きな違いです。

私たちは、今日、他のメッセージの中でそれを見ています。なぜなら、今日、教会を悩ませている世界的な最大の教えの1つは、「今日の教会に対する命令は、実際、イエスの来臨に備えて“世”を備えることである」それに対し、イエスは言われました。「わたしは、あなたがたのために場所を用意する」

**わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。（ヨハネ14章3節）**

「なぜなら、わたしは、この世に対処するのだ。そしてあなたは、全く、その対処を受ける運命にない」再臨では、不信者は、神の裁きによって地上から取り去られます。救いのためではなく。分かりますか？再臨では、イエスが来られる時に人々は裁きに苦しむことになります。覚えておいてください。彼は愛に満ち、反対の頬を出して、口バに乗ったすばらしい救い主、混乱したエルサレムのことで泣くではありません。いいえ、イエスは“いくさ人”として来られるのです。これは、クリスチャンが苦勞していることの1つです。イエスは、初臨の時には罪に定めるためではなく、救うためでした。しかし再臨は、全く違います。イエスは、全ての敵を滅ぼします。そして彼は、そこに座り、エルサレムから統治されます。これはまさに、残念ながらユダヤ人が目を凝らしていることに他なりません。彼らが目を向けているのは、唯一、敵を滅ぼす裁きが起り、そして、エルサレムに彼の御国を確立すること。彼らは、彼はまず来て、彼らの罪のために死ななければならなかった、という部分を完全に無視しています。しかし私たちは、2つの異なるものがあることを見えています。私たちが救い出される携挙。再臨では、人々が取り去られるのは、実際、裁きのためです。黙示録19章20節から21節。

**しかし、獣は捕らえられ、また、獣の前でしるしを行った偽預言者も、一緒に捕らえられた。このしるしによって、獣の刻印を受けた者や、獣の像を拝んでいた者どもは、惑わされていたのであった。獣と偽預言者の両者は、生きたまま硫黄の燃えている火の池に投げ込まれた。（黙示録19章20節から21節）**

多くの人は思っています。地獄は、もしくは他の呼び方をしたとしても、不信者、またはキリストを拒否する者たちが最終的に行く場所は、「停止」という概念があります。つまり、「一度地獄へ行くと、そして、イエスは全てのものを新しくされると…、新しい天、新しい地、地獄さえも存在しなくなる」パッと停止。あなたはいなくなる。シュッ！と、あなたは蒸発する。聖書には反対のことが書かれています。あなたは、死ねればと願います。彼らは…、

**生きたまま、硫黄の燃えている火の池に投げ込まれた。残りの者どもは、馬に乗っている方の口から出ている剣で殺され、すべての鳥は、彼らの肉を飽きるほど食べた。（黙示録19章21節）**

本当に恐ろしい場面です。これは、神が私たちに用意しておられるものではありません。これは私たちの定めではありません。驚くべき希望の1つ、私たちにある祝福された希望は、私たちに永遠の命が定められている、ということ。私たちに、すべての理解を超えた神の平安が定められています。私たちに、聖なる美しい神の臨在が定められています。だから、これらは絶対に違います。これらの人たちは、基本的に自分たちが蒔いた種を刈り取ります。ヨハネの黙示録19章11節から16節。

**そして、私は天が開かれているのを見た。すると、見よ、白い馬が現れた。それに乗っている方は、「誠実」および「真実」と呼ばれて、正義をもって裁き、また戦われる。その目は燃え盛る炎のようで…、**

これはイエスです。

**頭には多くの王冠があった。この方には、自分の他はだれも知らない名が記されていた。また、血に染まった衣を身にまっており、その名は「神の言葉」と呼ばれた。…（黙示録19章11節から13節）**

ヨハネの福音書1章によると、「神の言葉」とは誰のことですか？イエスです。

**ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。（ヨハネ1章14節）**

それは、今、世界に戻ってくる神の言葉と同じです。

そして、天の軍勢が白い馬に乗り… これは誰ですか？私たち全員です。白く清い麻の衣をまとってこの方に従っていた。（黙示録19章14節）

見てください。御使いは衣を着る必要はありません。御使いは、清い麻の布は着ません。清い麻の布を着るのは私たちです。お分かりですか？それによると、軍勢は、彼らはどうなりましたか？

そして、天の軍勢が白い馬に乗り、白く清い麻の布をまとってこの方に従っていた。（黙示録19章14節）

そして、彼が言ったことを見てください。

この方の口からは、鋭い剣が出ている。諸国の民をそれで打ち倒すのである。（黙示録19章15節）

おそらく、皆さんは言うでしょう。「この描写のイエスは、かなり陰惨<sup>いんさん</sup>だな。私の知っているイエスは、これじゃない」言わせてもらおうと、私たち全員が、ここを出る時、世界はこのような恐ろしく、極悪非道で悪魔のような慣習に陥っていくのです。様々な慣習です。信じてください。正しい裁判官は、彼らを滅ぼす時、すべきことを知っています。それはまるで…、たとえて言うと、想像してください。12人のISISテロリストがいて、そして、あなたは彼らを驚かせるため、ひどいたとえで申し訳ないのですが、皆さんに理解してほしいのです。あなたは、彼らを驚かせます。ドアを開け、まさに彼らが人を殺したり、強姦したり、虐殺したり、斬首したりしている最中に驚かせます。あなたは、彼らをどうしますか？ソレイマニ将軍は、どうなりましたか？私たちは、彼が着陸し、オリーブの枝を持って走るまで待ち、彼を抱きしめて、「お願いします。何千人もの人を殺すのは止めてください」と言いましたか？いいえ。彼は、しかるべき報いを受けました。ボンッ。私は写真を持っています。皆さんは見たくないでしょうが、信じてください。背の高い強者から…残されたものは皆さんのカバンの中身よりも少ない。その裁きには、居合わせないほうがよい。そして、聖書は言います。

諸国の民をそれで打ち倒すのである。また、自らの鉄の杖で彼らを治める。この方はぶどう酒の搾り桶<sup>しぼ</sup>を踏むが、これには全能者である神の激しい怒りが込められている。この方の衣と腿<sup>もも</sup>のあたりには、「王の王、主の主」という名が記されていた。（黙示録19章15節から16節）

信じてください。この世界には住みたくないはずです。大患難を通して行われることを体験したくはないでしょう。皆さんが、恐ろしい犯罪、残虐行為と見なすものが、その時、世間では、「良い習慣」として定着しているのです。イエスは戻ってきて、全てに終止符を打たなければならないのです。

もうひとつ、携挙と再臨の大きな違いは、携挙は隠されているということです。隠されています。私たちのまわりの人は、それが起こるのを目撃しません。私たちは、いなくなります。どのくらいの速さで？シュッ！瞬<sup>まばた</sup>く間に。みんなで瞬<sup>まばた</sup>きしてみましよう。そのくらいの速さです。分かりますか？私たちは消えてしまいます。私たちのまわりの人たちは、誰も私たちが、どこにいるのか分かりません。これは、彼らが、主が来られるのを見て、そして、我々がメリー・ポピンズのように上に上っていくのを、誰もが…。違います。私たちは永遠に移され、私たちは、新しい体で天の領域に移されます。聖書によると、私たちの体は、このままでは、どれほど見栄えが良くても、どれほど健康であっても、どれほど鍛えていても、天国には入れない。だからこそ、パウロは第1コリント15章51節で言っているのです。

聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。（第1コリント15章51節）

パウロは、テサロニケの信徒に告げたのと同じように、携挙について述べています。

終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。（第1コリント15章52節）

ですから、私たちが連れ去られる時、世界は実際、何も見えませんが、シュッ！と私たちはいなくなります。ある意味、信じられないかもしれませんが、世界は喜び祝います。ふーっ！やっと、この人たちがいなくなって、我々のやりたいことができるようになった。もう、「間違っている！間違っている！間違っている！」と言われず、もう、「神が裁く！」「神が裁く！」と言われない。ああ、せいせいした！ここから出て行け！聖書によれば、引き留めるものが取り去られると、その時、反キリストは真の顔を見せます。そして彼が支配し、だれもがその嘘に陥る。しかし、イエスの再臨は別ものです。繰り返しになりますが、聖書によると、携挙は瞬間的で、隠された出来事です。第1コリント15章、

**聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。（第1コリント15章51節から53節）**

見てください。「死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです」世界は、世に限って言えば、彼らは何も理解できず、何も見えない。しかし、聖書によれば、再臨はすべての人に見られます。ヨハネの黙示録1章7節は言っています。

**見よ、彼が、雲に乗って来られる。そして何ですか？すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。（黙示録1章7節）**

彼を突き刺した者たちとは、誰なのか？預言者ゼカリヤが語る民とは、誰のことか。

**彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見…。（ゼカリヤ12章10節）**

イスラエルです。彼は言います。すべての人、全世界が彼を見る。イスラエルの民でさえも。そして、「みな…」 「皆」と言ってください。

**地上の諸族はみな、彼のゆえに嘆く。しかり。アーメン。（黙示録1章7節）**

また、携挙とイエスの再臨のもうひとつの重要な違いがあります。それは、携挙がいつでも来る可能性があるということです。携挙の前に起こるべき事は何もありません。どうして分かるのか？私は知っています。なぜかと言えば、パウロが、テサロニケの人々とテトスに、携挙が間近に迫ることに関して書いているからです。パウロがギリシャのテサロニケの教会に携挙を説明した時、パウロは言いました。「キリストにある死者が、まず初めによみがえり…」そして彼は、「“その時代に生きている者は”、生きたまま…」とは言っていない。いいえ。彼は言いました。「次に生き残っている私たちが…」 “私たち”。パウロは、自分が生きている間にも、携挙が起こる可能性があるかと確信していたのです。ところで、私たち全員が、こういう人生を送るべきだと私は言いたい。確信し、期待して祈る。何よりも、あなたが生きている間に、携挙が来ることを切望する。もしあなたが、「ああ、あと5年、10年はかかる」という態度で生きるなら、いいですか？

あなたは、ともしびの油を持っていなかった5人の乙女のようになるでしょう。そして、花婿が来た時に、彼女たちは準備ができていなかった。テトス2章13節。

**祝福された望み、すなわち、大いなる神であり、私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現れを待ち望む…（テトス2章13節）**

それが、私たちの生き方です。「彼の現れを待ち望む」ちなみに、ギリシャ語の「現れる」という言葉の意味は、彼が、“永久に来る”のではなく、“現れ”です。彼が、天に“現れ”、そして私たちは、彼と一緒にあります。これは、再臨ではありません。しかし再臨は、特定の出来事が起こるまでは起こりません。そのため、黙示録にはイエスが地上に戻られる前に起こる、全ての出来事が記述されているのです。その時、彼は、彼

の軍勢と共に馬に乗り、私たちの全員が清い麻の布をまとして、彼の後に従います。第2テサロニケ2章4節では、ある男のことが語られています。

**彼は、すべて神と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗し、その上に自分を高く上げ、神の宮の中に座を設け、自分こそ神であると宣言します。(第2テサロニケ2章4節)**

それはもちろん、私たちに2つのことを告げています。まず第一に、彼が世界のリーダーになることを伝えています。より力強く、より価値ある者のように思われ、それから、おそらく、周りの誰よりも強いでしょう。しかし彼がより強く、より価値があり、より力があるのは、人間に対してだけでなく、しかし、彼は実際には…「すべて神と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗し」自分以上に崇拜されるべき者は何もない、と言います。私は、崇拜されるすべてのものの上にいる。そのため彼は、「…その上に自分を高く上げ、神の宮の中に座を設け、自分こそ神であると宣言します」これは、まだ一度も起きていません。それは、エルサレムに第三神殿が建設される時に起こります。そしてユダヤ人は、彼らが“神の家”と呼ぶ場所で神を礼拝する時、彼は、その“神の家”に入り、ユダヤ人に「私が神である」と告げるのです。そして反キリストが、自らを神と宣言する時、ユダヤ人はどうなるでしょう。ユダヤ人は、何と言うと思いますか？「ようこそ」ですか？あるいは、「あなたは神ではない！」ですか？ユダヤ人にとって問題なのは、人間のような者が神を名乗る時です。私たちは2000年前に、それをしていました。ということで、神殿が完成した瞬間、神の家が出来た瞬間、彼は、彼らを欺きます。最初の3年半、彼は彼らを欺いて、彼はイスラエルを愛している、エルサレムを愛している、イスラエルの神を愛している、と。彼は、イスラエルの神のために家を建てることを、彼らに許します。そして時が来れば、彼は本性を見せ、ひるがえって、そして言います。

「よし、神はいない。私が神である。今すぐ、私を崇拜しろ」

すると、彼らは逃げます。彼らは逃げてゆくのです。彼らは、ひどく恐れ、そして神は…、聖書は黙示録12章で言っています。彼らのために用意された場所で、彼らを養われます。正確に7年間の残りの期間、1260日分、聖書の暦で、ピッタリ3年半です。それからイエスが来て、彼らを連れ戻され、彼らが彼をメシアとして受け入れると、主が彼らを支配されます。マタイの福音書24章29節から30節。

**だが、これらの日の苦難に続いてすぐに、太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は天から落ち、天の万象は揺り動かされます」(マタイ24章29節)**

ほら、私はタール山（フィリピンのルソン島にある火山）の噴火の画像を見たことがあります、それらの画像を見てきましたが、本当に驚きでした。実際、きれいな画像もありました。他の画像は怖くて、ショッピングモールの画像を見たら、信じられないほどの煙と火の雲が背景にあって、これで終わりかと思うでしょう。火山を背景に、結婚式をしているカップルの写真を見ましたが、彼は幸せ、彼女は幸せ。彼はきっと、「この姑は、もう長生きしないだろう」と思っていたのでしょうか。（笑）皆さん。ある人たちは、これらの光景は、まるで世の終わりのようだと言っています。しかしひとつ私に言えるのは、このタール山は、たいしたことはありません。これは、ただの産みの苦しみです。それと同時に、日本でも噴火がありました。そしてもうひとつ、メキシコでも72時間前後に噴火しました。それらは、過去2週間に起こった25回の噴火の一部です。これらは、産みの苦しみです。しかし、イエスの来臨の時が来ると、聖書は告げます。

**星は天から落ち、天の万象は揺り動かされます(マタイ24章29節)**

揺り動かされるのは、地だけではありません。天の万象が揺り動かされます。揺さぶられて、星が全部降ってくるような感じです。まるでそれが、糸でぶら下がっているように。そして聖書は告げています。

**そのとき、人の子のしるしが天に現れます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら…**

彼らは、イエスを見て喜びません。彼らは嘆きます。



人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見るのです。

何ですか？“大能と輝かしい栄光”です。信じてください。唯一、イエスが来られることを喜ぶのは、イスラエルです。なぜなら、まさに彼が、3年半の間、彼らを養い、そして、まさに反キリストの怒りから彼らを救い、そして、まさに彼らを自分たちの土地に連れ戻して、そして、まさに彼らは、自分たちが突き刺した方を見たのです。そして彼らは嘆きに、嘆きます。しかしこの嘆きと悲しみは彼らの悔い改めで、それが贖罪の日の成就です。そうして彼らは救われます。まさにパウロがローマ11章に書いている通り。

こうして、イスラエルはみな救われる。(ローマ11章26節)

黙示録6章15節から17節。

地上の王…

今、私が描写しているのは、裏で世界を動かしている、すべての政治家や金持ち、実業家たち、ジョージ・ソロスとその仲間たち、ロスチャイルド家、ロックフェラー家、その他のすべて、ヨーロッパから、さらに中国からさえも。そして聖書は言います。

力ある者、また、奴隷も自由な身分の者もことごとく、洞窟や山の岩間に隠れ、山と岩に向かって、『私たちの上に覆いかぶさって、王材に座っておられる方の顔と小羊の怒りから、わたしたちをかくまってくれ』と言った。神と小羊の怒りの大いなる日が来たからである。だれがそれに耐えられるであろうか。

(黙示録6章15節から17節)

分かりますか？教会や牧師は、ときどきイエスの再臨の間違ったイメージを売り込みます。「全世界がきれいになりますよ」皆さん、美しいものは、私たちの携挙です。そうです！美しいのは、私たちが行くところであって、私たちが後に残すものではありません。亡命とは、その道中を、私たちが恋い慕うものではありません。何が美しいかという、その場所、今は皆、お金に走り、宝石や貴金属、ダイヤに走っていますが、それが新しいエルサレムでは、<sup>ほどう</sup>舗道になるのです。そういうものを全部、私たちは笑うのです。この世では、そういったものに周りが皆、発狂していますが。

そこで私の質問は、私たちは、本当に再臨に備える必要があるのか？それとも、本当に信者に約束されているものとは何なのか？第2テモテ2章は告げています。

次のことばは信頼すべきことばです。『もし私たちが、彼とともに死んだのなら、彼とともに生きるようになる。もし耐え忍んでいるなら、彼とともに治めるようになる。もし彼を否んだなら、彼もまた私たちを否まれる。私たちは真実でなくても、彼は常に真実である。彼にはご自身を否むことが出来ないからである。

(第2テモテ2章11節から13節)

聖書は、私たちが楽しみにしなければならないのは、私たちがここから連れ出されることだと言っています。そして、私たちが彼と一緒に戻ってきた時、彼と共に統治するのです。それが私たちの運命です。では、再臨の目的は何か？イザヤ書53章によると、

しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。それゆえ、わたしは、多くの人々を彼に分け与え、彼は強者たちを分捕り物としてわかちとる。彼が自分のいのちを死に明け渡し、そむいた人たちとともに数えられたからである。彼は多くの人の罪を負い、そむいた人たちのためにとりなしをする。(イザヤ53章5節から6節、12節)

ですから、わかりましたか？イエスは戻ってきて、私たちが地上に連れ戻し、千年にわたって地上を支配されます。皆さん、私が何度、自問自答していたか分かりますか？

「主よ、どうしてですか？どうして、わざわざ天国まで連れて行って、そして7年後、この世に帰れと言うのですか？なぜ、そこにいてはいけないのですか？私は、地上に何の未練もありません」

それは、とてもシンプルです。私が聖句から得た答えは、基本的には

「わたしが、ここに戻ってきて、ここを支配しなければならない理由は、この世の人々が、わたしが統治しているのを見て、そして千年王国の終わりに、わたしが最終的に彼ら全員を裁く時、もはや、言い訳は出来なくなる。なぜなら、彼らはわたしを見ており、彼らはわたしの支配下にいて、周りにサタンはいなかった。サタンは、あの底なしの穴の中にいたのだ。毒蛇はおらず、世界中に、もはや不正はない。それなのに、サタンがしばらくの間、解放されると、彼らは彼に加勢する。だから、わたしが彼らを裁くとき、わたしは義をもって彼らを裁くのだ」

その時、私は思ったのです。「でも千年って、またここに留まるには長くないですか？」そして、私が受け取った聖句は、

**すなわち、主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。（第2ペテロ3章8節）**

私たちが栄光の体に変えられる時、私たちにとって、時間の概念は違うのだと信じています。私たちにとっては、それは、ものすごく早く過ぎるのでしょうか。そして実際、目的を果たすのでしょうか。ユダの手紙15節から17節。

**アダムから七代目のエノクも、彼らについて預言してこう言っています。『見よ。主は千万の聖徒を引き連れて来られる。すべての者にさばきを行い、不敬虔な者たちの、神を恐れずに犯した行為のいっさいと、また神を恐れない罪人どもが主に言い逆らった無礼のいっさいとについて、彼らを罪に定めるためである。』（ユダ15節から17節）**

主は、裁くために戻って来られます。裁きについては、今日、後で見えていきますが、ヨブでさえ、それを話していました。ヨブ記は、聖書全体の中で最も初期に書かれたと考えられています。黙示録19章11節から16節は、もうすでに見ました。

**すると、見よ、白い馬が現れた。それに乗っている方は…、その目は燃え盛る炎のようで、頭には多くの王冠があった。（黙示録19章11節から12節）**

これは、もう見ましたね。そこで皆さんに質問です。イエスが、いつ地上に帰ってこられるか、私たちは知っているのでしょうか？私たちに分かりますか？率直に答えます。はい。でも、それがいつ始まるかは分かりません。私たちが数えるべき日数は、正確に分かっています。何年間、何週間、何日間であるかは、正確に把握しています。私たちは正確に知っています。しかし、それは携挙の日から始まり、そして、それは私たちが知らないものです。ダニエル書9章は、イエスの再臨を理解するための鍵であることを知ってください。皆さん、おそらく見たことがあるでしょう。私は以前、ダニエル書の70週について、ここで教えたことがあります。



と思います。しかし、この表をお見せしましょう。ダニエルは幻の中で、70週の期間が与えられました。それは、彼の民とエルサレムの都に定められています。ダニエルは、大天使ガブリエルから描写が与えられ、彼が言うには、70週の期間がある。ダニエルの預言における1週間とは、7年の期間のことです。旧約時代の聖書の1年は、今日でもまだユダヤ歴で用いられていますが、一貫して、1年は360日です。太陰暦に従っていますから。なので、70週は、70週×7年間×360日。ダニエルは、数え始めるべき正確な日を与えられました。そして、大天使は彼に言いました。

えられませんでした。そして、大天使は彼に言いました。

**引き上げてエルサレムを再建せよ、との命令が出てから…**

これは、ネヘミヤ記2章で与えられたことを知っています。紀元前445年に、アルタシャスタが、ネヘミヤに与えました。そこから数え始めます。さて、彼が言ったことを見てください。とても面白いことを言っています。彼は言います。

**メシアが来るまで、七週と、六十二週… そして、その六十二週の後、油注がれた者は断たれ…**

彼が決してしていないことのために。それから、エルサレムの都が滅ぼされる。7と62で69です。69×360日=173,880日。私たちは、イエスがエルサレムに入り、宣言されたその瞬間、その日、その月、その年を正確に知っています。その時、初めて彼は、弟子たちに「彼がメシアである」と言うことを許しました。覚えていますか？それ以前の彼は、常に彼らに言っていました。「誰にも言うな」「誰にも言うな」「誰にも言うてはいけない。まだ、その時ではない」覚えていますか？マタイの福音書16章20節。ピリポ・カイサリアで、「だれにも言わぬよう」マタイの福音書17章9節、変貌の山で、「だれにも話してはならない」「まだ、その時ではない」しかし、時が来て、その日が来ると、彼はパリサイ人たちに言いました。

**もし、この人たちが黙れば、石が叫びます。(ルカ19章40節)**

その日、来るべき君の都入りの日、彼は、西暦32年4月に都入りされました。そうすると、もちろん69週の後、まだ1週間残っていることが分かります。分かりますか？ダニエルに与えられた幻は、最後の69週と最後の1週が、完全に切り離されています。なぜなら、ダニエルは預言者ですから…。皆さん、理解しなければなりません。預言者は、自分の思いや、自分の解釈から発言しません。彼らは、神から幻を受け取ります。そして預言者とは、山頂を見る人のことです。でも皆さん、山に登って気づいたことが何度あるでしょうか。「おっと、これで終わりではない」実際には谷があって、もっと高い所があって、しかし、谷間が見えません。そして、彼に見えなかったものは、今日に私たちが生きる教会時代の谷間全体です。しかし、彼は最後の最後に、もう一週間あることを見る事が出来ました。70週目。70週目は、教会の携挙から始まります。引き止めるものが取り除かれた後、反キリストが明らかになります。3年半の間、彼は世界を試して、3年半、人々に恐ろしいことをする。もちろん、そして私たちと一緒にイエスの再臨です。ちょうど、その7年後。それから、千年王国が始まります。千年王国の終わりには、すべてが永遠になります。新しいエルサレムで永遠の命に至るか、それとも、火の池の中で永遠の命に至るか。ちなみに、死はありません。死は、どうなったのですか？死は、火の池に投げ込まれた。死とよみは、火の中に投げ込まれ、人々は死にません。彼らは、残念ながら歯ぎしりをするような場所にいるのです。死ねればいいのに、と願う場所です。だから、全廃論は聖書的ではないのです。

では、この預言は、どこの国のことを言っているのでしょうか？イスラエル。この預言は、どこの都のことを言っているのでしょうか？エルサレム。では、幻とは？70週の幻です。7週、62週、そしてもちろん1週。それは、490年の期間であることが分かっています。しかしそれは、最初の7週と62週、そして最後の1週に分かれています。スタート地点は？出発点がいつなのかは、私たち全員が知っています。神殿とエルサレムの都、両方の再建が命じられた時です。もちろん、何人かのバビロニアやペルシャの王が、命令を下しています。しかし、紀元前445年のアルタシャスタ以外に、だれひとりとして、神殿と都のために命令を下した者はいません。ネヘミヤ記2章5節から8節で、彼は、ネヘミヤがエルサレムの町を再建することを許可しています。つまり、ダニエル9章25節の出発点は、ネヘミヤ記2章5節から8節で、紀元前445年です。そして、ダニエルは言いました。

それゆえ、知れ。悟れ。引きあげてエルサレムを再建せよとの命令が出てから、油そそがれた者、君主の来るまでが七週。また六十二週の間、その苦しみの時代に再び広場とほりが建て直される。

(ダニエル9章25節)

ですから、ご覧のように7週+62週は、483年です。ここでハッキリと分かるように、聖書の暦でいう483年は、実際、今日の太陽暦で476年です。

ロバート・アンダーソン卿は、1988年から1901年まで、ロンドンの首都警察の警視監でした。彼は『Coming Prince (来るべき君主)』という本を書いています。彼は理解していました。ネヘミヤ2章とダニエル9章は、私たちが正確に理解するためにツール (道具) を与えていることを。イエスのエルサレム入城の日、あの棕櫚 (しゅろ) の聖日の勝利の都入り、それが、彼の書いた本、『Coming Prince (来るべき君主)』です。可能な方は、ぜひ、読んでみてください。これは、かなり見事です。これが計算の仕方です。69週×7年×360日=17万3,880日。そして、もちろん1年を360日とすると、1260日は3年半。それから、もちろん私たちは知っています。黙示録では大患難を前半と後半に分けていて、2人の証人が前半に登場します。1260日<sup>あか</sup>です。そして彼らは取り除かれ、後半は、14万4千人がイスラエルの部族から出て来ます。そして、彼らは証しを伝え始めます。もちろん、その時、黙示録12章で、彼らを殺そうとする反キリストから、イスラエルが守られます。そして彼らは地上で、イエスの再臨に備えます。では、住所変更をするのはだれですか？見ての通り、イエスの再臨とは、私たちが昔の住所に戻ってくるのです。携挙では、私たちが住所を変更します。イエスは、ヨハネの福音書14章で言われました。

**わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。(ヨハネ14章3節)**

イエスは私たちをここから連れ出して、彼と一緒にいるために、まもなく来られます。そして私たちは地上に戻り、彼とともに治めるのです。ローマ人への手紙13書には、こう書かれています。

**あなたがたは、今がどのような時か知っているのですから、このように行いなさい。あなたがたが眠りからさめるべき時刻がもう来ています。というのは、私たちが信じたころよりも、今は救い (体の救い) が私たちに もっと近づいているからです。夜はふけて、昼が近づきました。(ローマ13章11節から12節)**

火山が噴火しています。民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、大地震があり、方々に疫病やききんが起り、戦争と戦争のうわさ… (マタイ24章、ルカ21章)

**ですから、私たちは、やみのわざを打ち捨てて、光の武具を着けようではありませんか。遊興、酩酊、淫乱、好色、争い、ねたみの生活ではなく、昼間らしい、正しい生き方をしようではありませんか。主イエス・キリストを着なさい。肉の欲のために心を用いてはいけません。(ローマ13章11節から14節)**

最後に、「キングダム・ナウ」に関するトピックで締めくくりたいと思います。「キングダム・ナウ」(Kingdom Now)という運動があります。彼らは、神の国のために世界を準備しているのです。彼らは、それを準備するために遣わされたのです。聖書はさておき、世界史もダニエルの夢でさえも、「キングダム・ナウ」の解釈には一致しません。イエスは、ローマ帝国時代に来られました。ですから、イエスの初臨は、「足を打ち砕く石」ではないことを、私たちは知っています。ローマ帝国は、「足」ですから。ダニエルが言っていることを見てみると、彼の夢の中で、彼が見たあの大きな像を見てください。ダニエルの夢の像が見えます。これは、ダニエルが解釈していたネブカドネザルの夢です。金の頭があり、これはバビロン。青銅の腹とももはギリシャ。メディアは、その間で、銀の胸と両腕。そして、鉄のすねはローマであることが分かります。そして、足は分断された国々で、これは、当時のローマ帝国の一部であると我々は信じています。そして再臨のイエスは、彼は岩であり、石であり、永遠に天の神である。そして、その彼が打ち砕くのです。過去のローマ帝国ではなく、過去のバビロンでもなく、未来の、分裂した恐るべき反キリスト王国の提唱者を、彼は粉々に打ち砕きます。イエスは、ダニエルの預言を未来のものとして言及されました。そして、彼はもちろんローマ帝国のもとで暮らしていた。だから、もちろん、当時のことを語っていたのではありません。



それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす憎むべき者』が、聖なる所に立つのを見たならば…

イエスは、未来の出来事を語っています。読者はよく読み取るように。(マタイ24章15節)

イエスはご自身のミニストリーの中で、王国について、未来形で語られました。マタイの福音書6章では、

『天にいます私たちの父よ。御名が あがめられますように。御国が来ますように。』(マタイ6章9節)

イエスは、「御国が来ますように」と言っています。私たちは、自分たちの力で神の御国をここにもたらずのではありません。

『御国が来ますように。みこころが天で行われるように地でも行われますように。』(マタイ6章10節)

イエスは戻って来られます。そして、彼は物理的に御座に座ることによって、地上に神の御国を確立されます。それは唯一、大患難の出来事があった後です。ヨハネが見ている御国の確立は、旧約聖書の預言と一致します。黙示録11章。

第七の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、天に大きな声々が起こって言った。「この世の国は、私たちの主およびそのキリストのものとなった。」そしてなんですか？「主は永遠に支配される。」

(黙示録11章15節)

未来形です。私たちが現在見ているもの、すべての王国は、主が戻ってきて、永遠に統治される時に、彼の御国となるのです。「新使徒改革運動(NAR)」というものがあって、彼らは主張します。

「イエスの来臨に向けて、この場所を準備するために召された特定の人々がいる」

これは聖書的か？もちろん違います。

夜明けになって、弟子たちを呼び寄せ、その中から十二人を選び、彼らに使徒という名をつけられた。

(ルカ6章13節)

今日の使徒もありますが、彼らは教会を設立し、聖書まで著した<sup>あらか</sup>1世紀の使徒ではありません。これらの人たちは、もちろん第1コリント9章。「私は使徒ではないのでしょうか？」と、パウロが尋ねています。

私には自由がないでしょうか。…私は私たちの主イエスを見たのではないのでしょうか。

1世紀の使徒たち、その条件は、もし彼らが教会の基礎になりたいなら、彼らが、彼ら自身の人生の中でイエスを見ていなければなりません。

あなたがたは、主にあって私の働きの実ではありませんか。(第1コリント9章1節)

その後、キリストはヤコブに現れ、それから使徒たち全部に現れました。(第1コリント15章7節)

イエスの啓示は、最終的なものであり、新しい啓示はありません。皆さん、イエスがおっしゃいました。「だれもこの書に加えてはならない。だれでもこれにつけ加えるか、またはここから取り除く者は、呪われよ」

愛する人々。私はあなたがたに、私たちがともに受けている救いについて手紙を書こうとして、あらゆる努力をしていましたが、聖徒にひとたび伝えられた信仰のために戦うよう、あなたがたに勧める手紙を書く必要が生じました。(ユダ3節)

黙示録22章18節から19節。

私は、この書の預言のことばを聞くすべての者にあかす。もし、これにつけ加える者があれば、神はこの書に書いてある災害を、その人に加えられる。また、この預言の書のことばを少しでも取り除く者があれば、神は、この書に書いてあるいのちの木と聖なる都から、その人の受ける分を取り除かれる。

(黙示録22章18節から19節)

最後に、すべての人への戒めとして、第1テサロニケ5章からの3節、4節で、締めくくりたいと思います。

御霊を消してはなりません。預言をないがしろにははいけません。しかし、すべての事を見分け…

すべてのことを見分けるのです。いいですか？クリスチャンは、スポンジみたいなもので、敵は何度も攻撃してきます。どうやって？世からではなく、教会の立場から。または、キリスト教の文献であるはずのものから。あるいは各地を回り、偽りの教義を教えている人々から。そして人々は、それらの恐ろしい教義に陥ります。彼は言います。

…本当に良いものを堅く守りなさい。悪はどんな悪でも避けなさい。平和の神ご自身が、あなたがたを全く聖なるものとしてくださいますように。(1テサロニケ5章19節から24節)

ところで、どうすれば聖化されるのでしょうか？イエスはおっしゃいました。「彼らを聖め別ってください。…」どうやって？「真理によって」。

あなたのみことばは真理です。(ヨハネ17章17節)

私たちが聖別される方法はひとつしかありません。それは神の言葉によってです。

あなたがたを全く聖なるものとしてくださいますように。主イエス・キリストの来臨のとき、責められるところのないように、あなたがたの霊、たましい、からだを完全に守られますように。あなたがたを召された方は真実ですから、きっとそのことをしてくださいます。(第1テサロニケ5章23節から24節)

お父様、あなたの御言葉に心から感謝します。あなたが来られる、祝福された希望に感謝します。最初にオリブ山に立って世界を裁くのではなく、しかし実際には、あなたと一緒にいるために私たちを連れて行くために。あなたが2000年近くかけて用意してくださっている豪邸に私たちをおらせるために。父よ。私たちが神の御怒りに定められていないことを感謝します。あなたの約束に感謝しています。もし私たちが耐え忍ぶなら、あなたは、地上に住む者たちを試みるために、全世界に来ようとしている試練の時には、私たちを守ってください。父よ。感謝します。私たちには、差し迫る、主イエス・キリストの現れの希望があります。私たちは雲の中に一挙に引きあげられ、空中で主とお会いします。もちろん、一番大事なものは、その瞬間から、私たちはいつも主と一緒にです。だから、この希望に感謝しています。この約束に感謝します。約束された方は真実な方ですから。私たちが偽りの教義に陥らないように助けてください。聖書にないものに陥らないように。あらゆるものを試し、そして、良いものだけを、堅く守り続けられるように。父よ、ニューライフチャーチに感謝します。この教会に感謝します。この教会の指導に感謝します。あなたが彼らに与えてくださった、常に御言葉に近づき、あなたの御言葉を、あなたの子どもたちに教えようとするその情熱に感謝します。お父様、ありがとうございます。今朝、あなたの御名を祝福します。

イスラエルの聖なる方、王の王、主の主、最初は神の小羊として来られたユダ族の獅子、平和の君、インマヌエル、私たちの救いであるイエシュアの御名、イエスの御名によって、私たちは祈ります。

神の民は皆、言います。

「アーメン」



メッセージ by Amir Tsarfati / Behold Israel :<http://beholdisrael.org/>

ビホールドイスラエル 日本語 YouTube チャンネル

<https://www.youtube.com/channel/UCLcuvC6Mr63AqwiiXDkwRVQ>

2020.04.09 (Thu)

※ 『ダニエルの70週 by アミール・ツアルファティ』 <https://youtu.be/WrRIONHfRX0>